

(III) 心疾患をもつ患児の心理学的特徴に関する研究

文教大学人間科学部心理学	岡 堂 哲 雄
東京女子医大看護短大心理学	長 谷 川 浩
〃 循環器小児科	安 藤 正 彦
	高 尾 篤 良
文教大学人間科学部人間科学科	中 村 俊 子
	新 井 三 枝 子
	石 坂 と よ み
	近 藤 敬 美
	服 部 弥 穂 子
	三 本 美 智 子
学習院大学大学院人文科学研究科心理学専攻	岡 堂 純 子

1. 知能検査によるアプローチ

1981年4月～同年11月のあいだに、「TK 式田研・田中ビネー知能検査」を患児48名(3歳～11歳)に、「日本版 WISC-R 知能検査」を患児26名(6歳～16歳)に施行した。前者(ビネー法)の平均IQは、108.23、疾患程度別には、軽症110.72、中等度112.33、重症105.89であった。後者(WISC-R)では、平均IQは、89.77(言語性IQ=89.92、動作性IQ=93.46)、疾患程度・運動能力低下度別には、軽度89.44、中等度102.67、重度59.0であった。術前、術後のIQ変動については2例を試みに行った(①71→85 ②76→91 IQの増加がみられたが、検討を要す)。

2. パーソナリティ検査によるアプローチ

1) ロールジャッパ・テスト

上記1と同時期に、「ロールジャッパ・テスト」を31名の患児に行った。反応領域・決定因、内容についての

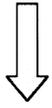
知覚分析では、疾患の重い子どもは知的、感情的な問題をもちやすいこと、発作性疾患の場合には抑うつ傾向がみられることが見出された。

2) CAT, CAT-H(児童用線画統覚検査, 同一人間版)

上記と同時期に「CAT」、「CAT-H」を、19名の患児に実施した。データ分析によると、母親との密着した関係、希薄な父親との関係などが指摘された。

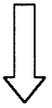
3. 母親の養育態度調査

1981年5月～10月のあいだに、母親の育児態度調査票(58問)を、患者の母親69名、対照群として文教大付属幼稚園児の母親91名と市川市国分幼稚園児の母親99名に記入依頼した。結果の主要点は、患児の母親の方が保護的態度—不安型、服従的態度—溺愛型を特徴とすることであった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 知能検査によるアプローチ

1981年4月～同年11月のあいだに、「TK式 田研・田中ビネー知能検査」を患児48名(3歳～11歳)に、「日本版WISC-R知能検査」を患児26名(6歳～16歳)に施行した。前者(ビネー法)の平均IQは、108.23、疾患程度別には、軽症110.72、中等度112.33、重症105.89であった。後者(WISC-R)では、平均IQは、89.77(言語性IQ=89.92、動作性IQ=93.46)、疾患程度・運動能力低下度別には、軽度89.44、中等度102.67、重度59.0であった。術前、術後のIQ変動については2例を試みに行った(71 85 76 91 IQの増加がみられたが、検討を要す)

。